駿河舞

その一

「綱はですな。渡邊綱は太刀ですよ。弓は季武。力は公時ですな。貞道？　貞道はどうして……智者ですよ」

済政は「智者ですよ」と言う時、秘密でも打ち開けるように声をひそめた。

「これだけの者が集まるのも、矢張り頼光どのなればこそですよ。え？　どうです。全くですよ。これだけありゃあ、向かうところ敵なし……」

源済政はまだそれほどの年でもないのに、妙に皺だらけの顔をして、話をしながら微笑(わら)うと額と頬の間に両眼が畳みこむようになった。

何時ものように、頼光の客間でやる作法抜きの酒盛の席であった。

秋の午後の陽が西から激しく照りつけて、縁側の西の庭に立て回した立蔀(たてじとみ)もかえって風通しを悪くして座敷の中は何しろ暑かった。袖(あこめ)の肌を脱いで汗に光った肩をだしていた道綱が、大きな口を尖った鼻の下で何時もの癖のように左の方へ歪(ゆが)めて、少し回って来た調子で済政を遮った。

「向うところ敵なし？　ところがだ。その季武共がとても歯がたたぬ恐ろしい敵があるんだ」

「そりゃ……頼光どの、」

「馬鹿な。親父のことなど言っているんじゃあない。俺が言うのはそんなんじゃあない。

え？……よく聞き給え。あいつ等が恐いのは牛車だ」

「うしぐるま？」

周りのものは一同怪訝な顔をした。

貞道はこちらの方で客に酒をついだり、小鉢の空になったのを片付けたりしていたが、道綱の言葉を聞いて困ったなと思った。ひた隠しに隠していたあの事を何処から聞いて来たのだろう。人もあろうに道綱が知っているとは。道綱は頼光の婿に当る公卿だが、公卿にもよりけりで、これは貞道もどうしてこんな人を頼光が婿にしたか判らないくらいであった。そりゃあ名門の出には違いないが甚だ感心しない。恐ろしく貧慾で無情で、酔って来るとまた恐ろしく行儀が悪くなり変な癖を出し、人の困るようなことは好んで意地悪く喋り散らすのであった。

あの事と言うのは、この春、賀茂の祭の見物に紫野へ行ったことであった、季武と公時と三人であった。先ず乗物は何にしようかと考えて、人混みに馬で乗込むのは危ないし、そうかと言って歩いて行くのも辛気だしと、季武が思いついて、或る寺の牛車を借りることにした。身分柄そのまま乗るのは憚れたので、簾を下して女車のようにして出掛けた。ところが三人には乗り慣れない牛車。祭に遅れまいと牛の鼻の緒を握った童が大急ぎで走ったので、中では滅茶苦茶に突上げられたり、揺すぶり倒されたりして、流石の荒武者共も、いやもう目がくらむやら苦しがってへどを吐くやら、唸るやら、「小僧、そう急ぐな」と言う声もロクに出ないほど参ってしまった。今から思えばあの時、傍から見たらどうだったろう。馳せて行く女車の中から烏を絞め殺すような声がするのを、不審に思って見送った人々も少なくなかったろう。目的地に着いた頃は、苦しいのを通り越して尻を逆にし

て折り重なって死んだように倒れていた。三人が漸く人心地がついて起き上って見ると、何の事だ、折角の祭は終ってしまって見物は戻るところであった。牛車はもう真っ平なので、見物が一人もいなくなったのを見済まして、ひそかに歩いて戻った。実に馬鹿馬鹿しいことであった。

間もなく季武の白状で頼光がそれを知った。機嫌が悪かった。何時も自分の名の引合いに出されるくらいの家来なので、余り変な物笑いになるような振舞はして貰いたくなかった。これは何時も頼光が彼等の失策のあるごとに言うところであった。貞道は主人の機嫌の悪い以上に後悔し切っていた。四十面を下げていい馬鹿がと思わずにはいられなかったのである。

道綱の周りにどっと言う笑い声が起った。貞道は台所へ下げるものを手にして逃げるように引下がった。

「それからと言うものはあの髭面共が、牛車を見ると怖気を振って逃げ出すと言うことだ」

道綱がそう言うと周りの者はまた、わっと笑った。道綱から二人ばかり置いて、頼光の弟の頼信がいた。大きな鋭い目、あざやかな眉と立派な額、鼻の下の髭もまだ水々しく若い。肥った大きな体を据えていた。彼も一同と共に笑った。笑うとその強い目が少し優しくなり、案外綺麗な歯が見えた。その一人おいて向うにいる頼光も仕様がなくニヤニヤしていた。

済政は、

「いや、しかし、牛車は牛車。彼等の本領は侍ですよ。彼等はつわものの道に立派であれば充分じゃありませんか。いや勿論牛車などに乗るから馬鹿げたことになるのですが、馬

に乗っていたら、どうです。それこそ我々でも見上げるような志を持っています。此の間関山で……え？　いや有難う注いで下さい」

済政は道綱がよろけて立って廊下伝いに行く姿を見て盃を乾しながら続けた。頼信は胡坐（あぐら）の膝に肱をついて、以前のように黙って魚を食った。頼光は横になって肱を枕にした。

「貴下方は、此の間の大赦で例の袴垂（はかまだれ）が放免になったことは御存知でしょう。あの時関山で人殺しがあったのはその放免になった袴垂の奴が殺したのです。その殺し方が普通のたくらみでなくて」

「袴垂は関山の道端で褌一つの真っ裸で死んだ振りをしていたのです。そうです。道を通る人もあったのですが、この死人が偽せものだと思う人はなかったようです。そこへ一人の侍が馬に乗って供を四五人連れて通りかかりました。侍はこの死人に気がついて、雑仕をやって死人を調べさしたのです。すると疵（きず）も何もない死人と言う返事です。それを聞くと侍はきっとなって、弓をとり直し、供の者を戒めて成るべく死人からは遠ざかるようにして、この死人に目を注ぎつつ恐ろしく用心して傍を通り抜けたのです。之を丁度見ていた通行人がありましてね。侍ともあろう者が武器を持って供をつれながら死人を怖れて通ったと言って、あとで大笑いだったそうですよ」

これだけではまだ話は終えたとは思えなかった。また話の見当もよくつかなかったが、一同は済政が単なるおべっか使いでないことにだんだん気がついて来た。

「ところがそのあとが事ですよ。暫くして、人通りがなくなった頃に一人の侍が馬に乗って来ました。供はつれませんでしたが立派な着物を来て佩（は）いている太刀も弓も見事なものだから、相当な侍だったのしょう。この侍が袴垂の傍を通りかかって、怪訝（けげん）そうに馬を近

付けて馬上から弓の先でこの空死人の体をつついて見たのです。すると袴垂奴がやにわにその弓にとりついて跳ね起きると、不覚にも弾みを食ってずれ落ちかかった侍の腰から太刀を引き抜いて、一刀のものに刺し殺したのです。袴垂はたちまち侍の着物を着て弓太刀を奪うと、その馬に乗って何処かへ馳せて行きました。……困ったことで、彼等、また何処かで一騒動起すことでしょう」

「誰か見ていたんですか」

「私の召使です。そのあとで蒼くなって飛んで帰って来ましたが」

その時ひどく酔った客の一人が何か急に叫んだが、たちまち周りからたしらめられた。

済政は言った。

「前の死人を警戒して通った侍こそ、あの貞道です。村岡の五郎ですよ」

一同は感嘆した。紫野での笑い草は何処かへ行ってしまった。

袴垂に戦慄する声とその袴垂に頭で戦い得る立派な侍を讃める声とが入り交じった。そして一同は再び前の酔態を取り戻したように騒がしくなった。道綱が廊下を戻って来た。

貞道が銚子と新しく肴を盛った皿を持って現れると、貞道を呼ぶ声があちこちから起った。盃を出されると貞道は当惑した。貞道は一滴も行かない下戸だった。今日の酒宴にも貞道は台所の雑仕達の指揮と銚子運びの役を頼光から言いつかっていた。客の相手の方は季武が当っていた。季武は言った。

「貞道は酒は駄目ですから、私が代わりに」

頼信はさっきからさかんに呑み且つ食っていたが、貞道の姿を見ると矢庭に大声で叫んだ。

「おい、五郎！」
「は」
貞道は頼信に向って膝をついた。
貞道の前には銚子や高杯（たかつき）や鉢などが一杯あって、正面にいる頼信までは大分距離があった。頼信は胡坐の両膝をついて赤い顔を上げて大きな声で言った。
「五郎やい。俺はお前に頼みがある」
「は」
頼信は貞道に返事をさせておいて、暫く前の皿の魚を箸でつついていた。そのまま顔もあげないで、
「お前は駿河の、美輪の平次と言う奴を知ってるか」
「いいえ」
頼信は貞道がその男を知って居ようが居まいが頓着しなかった。
「彼奴、この間京へ来て俺に無礼な振舞いをした。生意気な奴だ。お前、一つ、ついでがあったら彼奴の素っ首を引っこ抜いて来てくれ」
一座の者はこの猛烈な言葉に吃驚して頼信と貞道の顔を見比べた。貞道も今度は頓（にわか）に返事が出来なかった。貞道は腹の中で、この殿ももう大分酔っているなと思った。済政は顔の皺を開き眼を丸くして、
「ほう。これは。いや貞道に狙われた奴こそ不運と言うものですな」
頼信は言うだけ言ってしまうと、此方は見向きもしないで、隣の白髪の老人に話かけた。何処まで本心で何処まで酔っているのか判らなかった。白髪の老人は頼信と話をしながら、

鉢から匙で煮豆をすくっては庭の犬に投げてやった。貞道は馬鹿らしくなって、とうとう最後の返事をしないでしまった。彼は散らかっている箸や皿を片付け、客が座を立って乱れている敷物を直した。

貞道は主人の頼光の次にはこの頼信を尊敬していた。まだ年は三十ばかりであるが腕前胆力押出し共にすでに立派に出来ていて、もう相当な名声さえあがっていた。しかし今の言葉はどうも少しおかしい。一体人を殺してくれなどと頼むのは本当に気心の判った腹心の家来に頼むべきことだ。自分は頼光の家来だから頼信は言わばまあ主人の筋に当るには相違ないとしても、未だ一度も頼信の家へ行って用事をしたことはない。こういう調子で物を頼まれるだけの縁はまだないのである。またよしんば自分を見込んで頼むにしても、秘かに呼んで話すのならよし。場所もあろうにこういう客の大勢いる席で大きな声でしかも深く考えないような風で言われたところで、いったいどんな返事が出来よう。子供じゃあるまいし、分別盛りの髭面がそんな話の拍子に真面目においそれと受答え出来るものではない。酒飲みのいい加減な応対としてもどうかと思うくらいだ。本当に酔っているからあんなことを言うのだろうか。しかしよく考えて見ると、この人には平常から少し突拍子なところがある。

貞道は五年前の事件を思い出した。それは道隆が関白になった時で、道隆の弟の道兼に事(つか)えていた頼信はこれを知って大いに憤慨したのである。その父兼家の為に政治的にあれほど奔走した道兼を関白にしないのは怪(け)しからんと言うのである。この俺が弓矢をとり太刀を振って中ノ関白（道隆）の邸へ躍り込んだならば、刃向い出来る奴があるものか。たちまち彼を亡きものに出来る。そして町尻殿（道兼）が関白になれるだろう、と言った。

言っただけではない本当にその用意をはじめた。

頼光はきいて吃驚した。道隆は頼光の無二の飲み友達であった。頼光は慌てて頼信のところへ駆けつけた。お前はまあとんでもない奴だ。考えてみろ。第一、お前はそう思っても先様もお邸(やしき)をお構えになるだけのことはある。果たして殿を亡きものに出来るかどうか判った話ではない。次にはだ。たとえ亡きものに出来てもその為に今度は町尻殿が関白になられる為の障りがそこに出来て来る。その次には、たとえ障りを押切って関白になられたとしてもだ。一統の恨みが残っていて、その恨みからお前の主の殿とお前自身を一生無事に守りおおせるかどうか全く判らぬこと。この種の恨みは、もうお前の親父の満仲の時にそういう相手から家に火をかけられたりして、もうこりこりだ。そう言われて頼信は、頼光の常識的な物の考え方に賛成したくないような気持はありながら、矢張り第一に、第二に第三になどと順ぐりに説かれているうちに、自分自身でも熱が冷めて来たらしく、考え止んでしまったのであった。

その後は幸いとそんなことはなかった。そして無事に関白は道隆から道兼に移って、その道兼ももう死んでいた。あの時は頼信の若かったせいもあったろう。しかしひょっとするとその時も今日のようにがぶがぶと酒を呑んでいたのかも知れない。こう言う一種の酔い方なのだろうか。若しこれが素面の時とがらりと違った酒飲みと言うものの調子であるとすると、酒を呑まない貞道には酒飲み全体に対し余り好感が持てなかった。

胴間声(どうまごえ)に合唱が起こった。その中から、

「呑め、呑めったら呑め！」

と急に大きな声がした。一人の客が大きな盃を右手に持って、左手でもう前後もなく酔

いつぶれて仰向けに倒れている一人の胸ぐらをゆすった。正体のない客は目をつむって蒼ざめた髭面に薄笑いのような表情を浮かべて、返事の代りに唸るのがせいぜいだった。盃を手にした客はいきなり盃の酒をざぶりとその酔いつぶれた客の顔へかけた。下の客もこれには流石にむせ返った。

「おいおい。あんたはそれだから不可(いけな)い。無理じゃあないか。さ、俺が相手になる。まあまあ」

他の一人が盃を振回している客を押えた。貞道はこちらで客の相手をしている季武の背中をつついた。底知れぬ酒量を有する季武は、こんな時に酒癖の悪い客の相手になって之を盛りつぶす役であった。季武はそちらへ回った。

正面の方では白髪の老人が匙を手にしたまま頼信の言ったことが可笑(おか)しいのか、口を丸くして笑っていた。老人はもう鉢の中の豆をあらかた庭の二匹の犬にやってしまっていた。諸肌ぬいでしまった道綱は、傍にいた済政の息子の資道をつかまえた。

「お前の鼻はいい鼻だ。気に入ったぞ。俺に舐めさせろ」

資道は冗談だろうと思ったのかそのままニコニコしていると、道綱はいきなり資道の頭を掴んで本当に鼻を舐め上げた。資道は異様な悲鳴を挙げて跳び上がった、他の客と話をしていた済政は吃驚して、

「何だ何だ。どうした」

と叫んで、息子が壁伝いにひょろひょろと縁側へ泳ぎ出して行くのを見上げた。資道は縁側に立って、

「ウエ―」

と言って袖で顔をこすった。

他の客達は他人の騒ぎは他人の騒ぎ、自分達は自分達で、まるで大声を競うかのように耳をろうせんばかりにお互いの応酬に熱しているし、縁側へ出て汚物を吐くものがあるやら、酔いつぶれた客は到る処で伸びてしまって人に踏まれても動けなかった。高坏はひっくり返り、小皿は飛び散って、魚や煮物の汁がこぼれ回り、座敷中が無茶苦茶に引っ掻き回したようになってきた。

庭では煮豆に味をしめた犬が、縁へ人が出ると盛んに尾を振った。

「おい、白こい、白こい。いやお前は毛が黒いから黒だろう。さあ黒こい黒こい」

犬は嬉しそうにその客の方へ向った。客は縁の角の向うの遣戸（やりど）の陰まで行くと、一きわ高く犬を呼んでおいて、いきなり前をまくった。にわかにも出ぬ小便であったが、犬は驚き飛びすさって吠えた。

「ハハ……ハハハ」

貞道は道綱がまだ若い客を捕えようとして座を立って行くのを見て、はじまったなと思った。貞道はまた季武の後へ行って、道綱を指した。季武もなかなか容易でなかった。貞道は下げる皿や銚子を両手に出来るだけ持って台所へ出て行った。貞道は、もう酒はいいだろうと思って台所に引込んでいた。

大分経って日もようやく翳った頃、客間の方がひっそりとなってしまった。台所からやって来て見ると、ほとんどの客が横になって寝ていた。道綱も頼信も、季武までも横になっていた。大半は日の当たらぬ方の縁側の簀子の上に出ていたが、中にはこの暑いのに壁の隅に俯せになっているのもあった。座敷から縁側まで、まるで大きな魚を岸に数しれず

釣り上げ放り出したようになって、凄まじい鼾(いびき)声の合唱であった。
貞道は毎度のことながら一寸憮然としてこの有様を眺めざるを得なかった。

その二

翌年の春もまだ浅い或る日、陽が南の空の真ん中に懸かっている時刻に、貞道は駿河ノ國の安倍ノ郡ノ小坂(おさか)から斯太(しだ)へ行く大和坂を越えていた。去年の秋、頼光の命で急に武蔵ノ國に行くことになり、十月に京をたって武蔵ノ国で冬を越した。その帰り道であった。供に連れたのは貞道が気に入りの家来で年は二十五になる逞しい惣次とそれから二十になる一人の雑仕の僅か二人であった。雑仕の名は杉太郎と言った。

貞道は坂の頂上に来て斯太(しだ)ノ郡の都武(つむ)ヶ野と斯太ノ浦の見えるところで馬をとめた。風は大分あった。少し寒いくらいだったが、今までの登り道で薄く汗をかくほどだったので却って気持が良かった。主従はここで道ばたに腰を下ろし、馬をつないで、破子(わりご)を出して飯を食った。

振り返ると富士が高く色淡く見えた。下には右手に有度浜の丘陵があって、その先には海の中に伊豆の山が遠く連なって横たわっていた。前の斯太ノ浦は海の上が風に波立って陽の光に白く眩しく光っていた。二、三の漁船が遥かに小さく黒く見えた。都武ヶ野原は、汀を埋めるように松の生え被った浜辺から緑色の野が平に広がって、人家は見えず、ところどころに何かの花が黄色く明るくなった場所や、白く光った川や、茶色や黒の雑木林な

どを交えながら、野は右手の遠い山の際までずっと続いていた。そのもっと右手の高い彼方は、真っ白な信濃の連山であった。

武蔵を出てから帰途、相模より足柄へはいって再び海へ出て、海岸づたいにやって来た。ずっと天気だったので、富士を高く右にして、途中、田子ノ浦、薩陀（さった）ノ浜、有度浜など景勝を楽しむことが出来た。この辺りが関東から京へ上るまでの間で一番眺めのいい場所であった。それももうこの大和坂で富士の大きな姿とは別れなければならなかった。

主従はゆっくり飯を食って、それから名残の富士を振返りながら坂を下りて行った。坂を下りきると、山路と余り変わりのないような貧しい細い道が左手の丘陵に沿って七曲り八曲りして続いていた。右手は沼地らしい一面の枯葦原。その根もとにはもう新葉が緑色に伸びていた。風は山の上のようにはなかったが、それでも時々吹いて来て葦を鳴らした。人の気配に驚いて飛び立った一羽の大きな鳥が、葦の上をすれすれに遠くへ逃げて行った。

葦原に沿った小川の岸には忘れられたような小さい桜の木が二三本あって、通りすがりに目をとめると細い枝につけた蕾が白いところを見せて膨らみかけていた。この桜ももう一日か二日で開くことだろうが、流石に暖かい国だけあって早い。京ではまだ何処の桜の枝も黒く裸で寒々としていることだろう。

右手の葦原が尽きると左手の丘陵も終わって、そこからやや目の前が開けて来た。これからは野原である。海の音が聞こえた。間もなく一つの浅い川があった。惣次は裸足になって履物を腰につけて、馬の口を引いて水にはいった。綺麗な水だった。冷たいので惣次は身をすくめた。向う岸へ上って、杉太郎が遅れたので、二人がぶらぶら行くうちに、あとから息をきって追いついた。荷物が背中で躍っていた。手に何か持っている。大きな鮒

を二匹、笹竹に鰓を通して、早いとこつかまえたと見える。貞道はそれを見て笑った。
「何だ、それは。京への土産か」
「いえ。へへ。まさか。これは今夜焼いて差上げます」
彼は道々、冬の鮒はどういうところにいるかとか、これはこの国でも変わらぬらしいとか、またどうして捕えるか、などと話した。ついで彼の親父が鮒とり名人であることも自慢した。惣次は黙ってきいているだけだが、貞道は馬上から機嫌よく相手になった。京の家の話が出ると三人とも一刻も早く帰りたい気持は同じであった。
木も余りない短い草の原を突っ切ってようやく海岸に近い松林の間へはいった。海が見えた。松林の間をしばらく行くと、そこで山向うの小坂の部落以来はじめての人間に出会った。
向うから来たのは侍であった。服装からいってこの土地の人であることは一目見て判った。馬に乗って供を四人連れ、その一人には弓をかつがせていた。土地でも相当な人だろう。侍は貞道の方をじっと見て通った。貞道も人なつかしくじっと見て過ぎた。行き過ぎる侍が後ろから不意に呼びかけた。
「もし。村岡どのではありませんか」
貞道は驚いた。こんな都離れたわびしい土地で、自分の名を呼ばれるとは思いもよらなかった。貞道が馬をひかえると武士は戻って来た。三十四、五の筋肉逞しい男で、陽に灼けた顔につり上がった細い目と出張った顎が奇妙に目立った。
「昨年の暮でしたか。庵原(いはら)どのの館でチラとお見受けしましたが、武蔵の方へお出(い)でるとかで」

この見ず知らずの男が馴れ馴れしく、またこちらの様子もしっているらしいのが意外であった。
「いかにも、私は五郎貞道ですが、貴方は」
「失礼しました。私は美輪の平次と申します。それで武蔵から今お戻りですか」
「そうです」
貞道は平次と言う名前が一寸思い出せなかった。平次は
「真っ直ぐに京へお帰りですか」と当り前なようなことを訊ねた。
「ええ勿論」
平次はこの時、よくわけのわからない、それでいて馬鹿に嬉しそうな笑顔をしながら一層馬を近く寄せた。
「この辺りは景色もよし気候も暖かで、それに今は寒くもなし暑くもなし、いい時に旅をされました、全く。別にお急ぎの旅ではなさそうですが、そうと知ったら用意をしておいて私の家へも寄って戴くんでしたのに。しかしもうこう行き過ぎては、引き返してお連れ申すのも御迷惑でしょうから、どうにも仕方がありません」
貞道はこの男の喋るのを儀礼的な笑顔で受けていたが、何故この男がこんなお世辞を言うのか不思議でならなかった。
「お宅と言いますとどちらで」
「この山を越して川を渡って四里ばかり行ったところです。安倍ノ郡美輪ノ郷です」
貞道はこの時頼信のことを思い出した。
「ああ、そうそう。美輪の平次どの、今思い出しました。そうそう。あの」

「いやなに」と平次は遮った。貴下（あなた）の気持ちは判っています。と言わんばかりの手付きだった。平次は声を一寸落して、
「あのことは京から知らせてくれた人がありました。前から知っていました。なに、つまらないことですよ、事の起こりは。そんなことでこの我々が命のとりやりをするなどはばかげていますよ、全く」
貞道は笑った。平次も肩をゆすって哄笑した。貞道は言った。
「私も不意にあんなことを頼信どのから言われて、面食らいました。少し馬鹿らしく思ったくらいです」
と、貞道も口が軽かった。
「それに何ですな。私は頼光の郎党でこそあれ、頼信どのの家の者ではありません。また物の頼みようもあります。そんなことを大勢の中で言うなど、少し常識を疑いますね。頼信どのは大分酔っておいでになったのです」
「いや、そうでしょうとも、全く」
平次は上機嫌で頷いた。貞道は、
「そんなわけで、馬鹿らしくて気にもとめてなかったので、すっかり忘れていましたよ。貴下にそう言われても一寸思い出せないくらいでした。もし貴下にお逢いしなかったら一生涯思い出しもしなかったでしょうよ。ハハ」
両人は供の者の呆気にとられている真ん中で再び声を合わせて笑った。まるで旧知のような交歓だった。平次は、
「お忘れになるほどの気持ちであって、お互いに幸福です。全く。そんな下らないことで

命のとりやりをするほど軽々しい命ではありませんからね、お互いに」
「そうです。この私も物のわからぬ年ではなし、馬鹿馬鹿しいことと、そうでないことのけじめぐらいはつきます。京からの知らせがあったのですか？御心配かけましたな」
「いや、心配って程のことはなかったのです」
と、この点になると平次は素直に頷かないで、
「兎に角、お互いにつまらぬことにならなくて結構でした。結構でした、全く。しかし、何ですよ。貴方がよしや今のようなお心持でなくとも」
と、平次は言葉をきると顎を引いて細い目を少し広げた。妙に不快な気持ちになって貞道の顔から微笑が消えた。平次は息を吸い込んで、独り言のように、
「私も美輪の平次と言われ、少しはこの辺りで知られている人間。そんな場合、京の方の考える通りに行くかどうか」
貞道はこの時横をむいて空咳を二つばかりした。平次は再び上機嫌で続けた。
「いや、全く結構でした。これから先もお互いに無用の争いもなく恙なく暮らせますから、全く。貴方のその心に喜びを申しましょう。もうお行きになりますか」
貞道が無言で馬を返したので平次は話を切った。
「じゃあ。縁ありましたならばまた」
「また」
と両人は別れた。二、三間行って平次はまた付け加えた。
「ほんとになんですよ。また東国へお出での節は、どうかお立寄り下さい」
貞道は振返って頷いた。

「おもてなししますよ」
松原を二町ばかり来て平次の一行が見えなくなると、貞道はそこにあった漁師の家か何かの荒ら屋の陰に、つとはいって馬から飛び下りた。その無言の緊張の顔が惣次には何を言っているのかすぐ判った。惣次は馬をひかえて命令を待った。
「腹帯を締めろ」
貞道はそう言って馬の用意を惣次に命ずると、自分の帯を解いて結び直し、胡籙（やなぐい）を背負い直し矢を揃えて、仕度の出来た馬に飛び乗った。
「弓をよこせ」
惣次は下から弓を渡した。貞道は二、三度弦を引いて見て左に掻（か）い込んだ。
「杉はあとから来い。惣次」
惣次は無言で主人の顔を仰いだ。
「いいか」
惣次が薄く笑うのを合図にして馬は跳び立った。
貞道は松原の中を疾風のように駆け抜けた。風が耳もとで唸り声を挙げ、松の幹が格子の影のように飛び過ぎた。馬は巧みに松の根をよけながら大きく凄まじい跳躍で大地を蹴って走った。馬具の軋り、大地からはね返る蹄の轟きなどの交錯した激流のような興奮が湧き上がって来て、貞道は久し振りで若い血を体の中に蘇らせた。
平次等が松原を外れて野へ出たばかりのところへ、飛びかかるような勢いで現れた。ギョッとして振返った平次に向って、破れるような声で罵声を叩きつけた。
「待て！　この馬鹿野郎！」

叫ぶと共に矢をつがえた。平次は狼狽(うろたえ)て手綱を引いて馬を返そうとしながら、
「そう来ると思ったぞ！」
と叫んだ。動顛(どうてん)した従者に馬がぶつかった。平次等の狼狽(ろうばい)している隙に貞道はたちまち十間ばかり近くに迫った。矢は離れていた。平次は向き返ったばかりの胸板を射られた。目を大きく見開いたまま叫び声も挙げずに反り返り馬の下へ転げた。貞道はその勢いのまま馬を轟かせて走り過ぎた。そしてたちまち馬を返すと、愚図愚図している従者に続けざまに矢を射て二人倒した。残った一人は躍り跳ねるような格好で叢の中へ逃げ込もうとしたが、これも貞道の矢を背中に受けた。平次の馬は主を失ったままで海岸の方へ走って行った。惣次が駆けつけて太刀を抜いて倒れている二人の従者の胸を刺した。貞道は三度馬を返すと倒れている平次に近付き、馬から飛び下りて太刀を抜くと、平次の背に躍りかかってたちまち首を掻き落した。
貞道が首を持って立上ると、惣次がよって来た。主従は息をつきながら無言で一寸の間顔を見合った。惣次は貞道を興奮と感嘆と尊敬の思いをこめて見上げたが、やがて涙が出て来そうであった。貞道は惣次の目から顔をそらし、叢の傍に倒れてまだ生きて動いている従者の一人を指して言った。
「あれも片付けてしまえ」
杉太郎がようやくやって来た。彼は鮒を下げたまま呆然としてこの有様を眺めた。惣次は最後の男に止めを刺した刀を草でぬぐっていたし、辺り一面の鮮血でありながら唸っている者さへなかった。
「杉、瓢に水があったな。出してくれ」

「は？はい」

貞道は平次の首を草の上において、その前に腰を下して水をのんだ。首は草の中から生えたように据わっていた。細い目はまだ夢でも見ているように開いていた。血沫を浴びた顔。鼻先と頬骨の角が陽の光に変に白く光った。

貞道は緊張が解けて気が落着いて行くと、何となく気が沈んで来た。矢張り自分がもう若者でないことがつくづくと判った。疲れたからと言うのではない、この沈んだ気持ちである。若者のように、こういう事をやり終えたあとの誇らしげな気持ちがもうなくなっているところに、自分の年齢を考えていた。後悔でもない。勿論矢張りこうならなければならないと自分でも思うのだ。しかしさっきまで気負い力んで、その上余裕を見せるためにお世辞さえ言っていた男が、この自分が不図(ふと)気が変わった為にたちまちこのような姿になって陽に曝(さら)されているということである。この儚(はかな)さである。最初の一撃で致命傷を与え、そのあとへ続けざまに畳みかけて瞬く間に屠(ほふ)ってしまうのが人を斬るコツである。今も貞道は経験から得たこの法に従って一分の誤りもなく行動し、事はたちまちすんでしまった。このあわやという間にすんでしまったのが、余計に事を儚く思わせるのであった。

不意に頼信のことが浮かんで来た。そして貞道は平次に腹を立てたあと、再び頼信のことを忘れていたのに気がついた。しかもカッとした自分だけの気持ちでやっていながら、結果は頼信の命令通りになっていた。

――お前は美輪の平次と言う奴を知ってるか。――

耳元でそんな声がするような気がする。貞道の手は無意識に、

――平次はそこに、――

と答えるように草の上の首を指さしていた。貞道はそれに気が付くと、あわてて手を引込めて顎をなでた。主人の頼光とは全く違った意味で、この若い頼信から気圧(けお)されるものを感ずるのであるが、自分がはかばかしく返事もしなかったような頼まれごとなのに、余りにもうまく頼信の思う通りに行ったことや、それをまた京に戻って頼信に報告する時の有様などを想像すると、少しばかり忌々しい気持ちもするのであった。

貞道は頭を振って立上った。惣次に瓢を渡して、

「お前も呑め」

「はい」

「余ったら杉にもやれ」

惣次はしきりに平次の馬を惜しがった。貞道はそんなことで不必要な道草を取りたくなかった。惣次等が休んでいる暇に、貞道は荷物の中から油紙を出して首をつつみ、布でくくって馬の鞍(くら)にしばりつけた。しばり終えると直ちに馬に乗って二人を促した。

「さ。少し急ぐぞ。日が暮れないうちに大井川を渡ってしまおう」。

〈日本小説代表作全集第九巻　昭和十七年前半期　小山書店〉

212頁　源頼光　……　平安時代中期の武将。弟頼信と藤原兼家、道長、頼通に仕え「朝家の守護」と呼ばれた。
頼光四天王と言われる渡辺綱、卜部季武（すえたけ）（坂上季猛）、碓井貞光（貞道）、坂田金時（公時、足柄山の金太郎）を率いて大江山酒呑童子はじめ大妖怪、土蜘蛛を退治した逸話が伝えられている。朝廷にまつろわぬものを武力で征服したことの言い伝えと思われる。

222頁　大和坂　……　現在静岡市駿河区小坂から焼津市花沢に至る峠、標高３０１ｍの古道。大和尊の東征の際に通ったという故事による。

222頁　斯太ノ郡　……　現在藤枝市と焼津市の一部、島田市の一部。志太平野は大井川扇状地で平安時代の駿河湾の海岸線は現在より数キロ内側であった。

225頁　安倍ノ郡美輪ノ郷　……　現在藤枝市岡部町三輪